

文学教材におけるイメージリーの有効性

中村 愛人

(2005年9月30日受理)

Use of Imagery in Literary Texts as English Teaching Material

Yoshito Nakamura

Some uses of literature as English teaching material have been discussed to some extent, but imagery which is, in a sense, essence of literature, seldom comes up for discussion. It has been known, however, that there is a close connection between imagery and memory. Then there is also a close connection between memory and learning or acquisition. So it is our aim in this paper to discuss how imagery is effective in learning English, and to study how to make good use of it by examining how it is adapted for high school English textbooks in Japan.

Key words: literary text, adaptation, imagery, image, memory, vicarious experience

キーワード：文学教材，改作，イメージリー，イメージ，記憶，追体験

1. はじめに

英語で書かれた文学作品の英語教材としての利点は何であろうか。英語を学ぶ目的にも様々あり、簡単に決められるものでもないが、普通に言われるのは、オーセンティックで多様な英語が提供できること、作品の背景となっている社会や文化が学べること、言語に対する感受性を育てること、人間的成長に役立つこと、作品の解釈の違いによりインターアクションの機会が得られること、面白く、また、学習者自身の経験と関連づけられ強い動機づけとなること、などであろう¹⁾。そして、これまた、それぞれに対して疑問点も挙げられている。

本論では、文学表現のイメージリーを、文学教材の有効性の一つとして論じる。イメージリーは、文学作品、特に詩においては極めて重要な働きをしていると認められるにもかかわらず、英語教材など、言葉の学習に関連しては、ほとんど取り上げられないことがない。

2. 文学作品の改作，教材化

文学作品に限られるものではないが、ある文章が教科書に教材として利用される時には、その多くが改作される。表現の一つ一つが意味を持ち、書き換えるこ

とのできない詩や、小説がラビッドリーディングに使用される場合以外では、ほとんど原作に何らかの手が加えられ書き換えられて教材になる。それは、主に(1)長さ、(2)英語のレベル、(3)内容の3つの観点から改作される。(1)長さについては、当然教科書の課に収まるように短縮する必要がある。小説の場合には、原作はかなりの長さが前提とされるので、内容的にもまとまりのある一番適切な場面だけを切り出すか、それに前後あるいは全体の説明を補うなどされることがある。短編小説は、比較的原作に近い形で使用が可能であるが、それでも部分的な省略や書き換えは多い。(2)英語のレベルについては、対象の学習者のレベルや学習の進度や目標を考慮して、難しい語彙、表現、構文などがやさしく書き換えられることになる。(3)内容については、固定した基準ではないにしても一応教室という場にふさわしくないと考えられるもの、例えば、暴力的な場面や過激な性描写などは避けられるし、酒タバコの類いの話題も取り入れられない。人生で避けて通ることのできない人間の死を扱ったものも、残念ながらお目にかかったことがない。また、(2)と同様に、学習者の理解できる範囲の内容が選ばれる。以上の三つの観点が、組み合わせられて教材化がされている。

ここでは、書き換えることが先ず考えられない詩は

別にして、物語り教材、特に小説や短編小説に限って論じることとする。上記のような観点から、大体が書き換えと省略で改作されるとして、どのような結果が予想されるであろうか。それは、作品の横道や脱線的な部分、表現の装飾的な部分、言わば、枝葉の部分の削ぎ落とされ、幹に相当する中心的なストーリーが残される。残念ながら、それは、原作からすると深みや変化の乏しい平板な作品になると考えられる。

そのようになるからと言って、決してそれが悪いと主張している訳ではない。小説における共通のそして最も基本的な楽しみが、このストーリーにあるのは疑いようのない事実であり、枝葉は削ぎ落とさなければならぬとしても、残すのは、やはり幹としての興味深いストーリーであろう。登場人物の心理の動きを追うとか、巧みな表現を味わうなどは、その後に来ることになる。

3. 文学作品のイメージリー

さて、この改作において、もう一つ失われると予想される貴重なものがある。それは作品のイメージリーである。イメージリーは、「作中の語句が、五感に訴える具体的なイメージを喚起する作用、ないしはそうしたイメージの集合体を表す」²⁾。別の言い方をすれば、それは「心中に描かれる事物の感覚的形象をいう。主として視覚的なものであるが、聴覚的、触覚的、味覚的、嗅覚的なものもある……文学では修辭的比喩、ことに隠喩 (METAPHOR) をさしていることが多い」³⁾。イメージリーは、文学的文章だけに特有のものとは言えないが、詩的言語の重要な機能の一つであり、注意すれば、小説などにも随所に見られ、また、作品の主題の表現に大きな役割を果たしている場合もある。

ここで何ゆえイメージリーに注目するのか。それは、イメージリーが、作品の表現の文学性や主題の表現に大きく関わり、また、作品を読む楽しみを与えてくれると同時に、記憶と言う面でも大きな働きをされると考えられるからである。後者の記憶と言う面について言うなら、学習との密接な関係は言うまでもない。作品の表現や展開が強く印象づけられ、しっかりと記憶されるなら、それは必然的に学習される可能性が高くなる。作品の読みを通したインプットから、学習されたその表現をアウトプットへと発展させることもできる。このように考えるなら、言葉を学習し使うためには、先ず表現に出会ったときにできるだけ強く印象づける、記憶するということが望まれるであろう。そこに、このイメージリーの出番があると考えられる。

4. 記憶

記憶には、宣言的記憶 (declarative memory) と手続き的記憶 (procedural memory) の2つがあり、前者は、更に、意味記憶 (semantic memory) とエピソード記憶 (episodic memory) の2種類に分けられると言われている。この記憶能力は、多くの神経細胞が同時に活性化されるときにのみ働き、細胞間の連結が強くなり、結合の持続力が強まる。このことは、「現実の学習に際しては、教師はできるだけ学習者に刺激に富んだ学習環境を提供するよう努めることが必要だということを示唆している。具体的には、教師は学習者が、たとえば視覚刺激と聴覚刺激を結びつける、というように、全ての感覚を通して学習することが可能になるよう工夫する必要がある。」⁴⁾ また、エピソード記憶と意味記憶は互いに依存的な面があり、エピソード記憶つまり体験記憶が多ければ多いほどある概念の意味記憶の固定がより強くなる。だから、「外国語教育においても、教室内で外国語の訓練が学習者にとって個人的な出来事となり、エピソード記憶として保存されることになれば、外国語の概念の意味記憶をエピソード記憶と結びつけることが可能となる。教師はこうして学習者の記憶作業を手助けすることができる。」⁵⁾

重要な情報を長く記憶にとどめるために行う認知活動は記憶方略と呼ばれ、有効だと言われる主なものには、リハーサル (rehearsal)、体制化 (organization)、精緻化 (elaboration) などがある。リハーサルは、少量の情報を口頭あるいは頭の中で何度も復唱することで、量よりも質が重要となる。体制化は関連する情報をまとめ整理する方略であり、記憶すべき情報に別の情報を付加して覚えやすくするのが精緻化である。その一つにイメージの利用があり、有効性が高い。

5. 追体験とイメージリー

このように記憶と記憶方略を取り上げてみると、文学作品を英語教材として利用することには、言葉の学習において大きな可能性があることがわかる。文学作品を読み共感して楽しむことは、読者にとって作品の世界を、言わば、体験する行為であろう。追体験あるいは代替経験 (vicarious experience) とも呼ばれる。文学教材を生き生きと楽しんで読むことができれば、上で引用した「外国語の訓練が……個人的な出来事になりエピソード記憶として保存され……」にふさわしい状況となり、意味記憶への強力な手助けともなる。更に、本論で対象とするイメージリーに関しては、記

銘方略の精緻化で、文学教材ゆえに豊富な機会が提供されているイメージ化を積極的に行うことで、記憶が促進されると考えられる。

6. 教材化された短編小説

文学作品の教材化によって、言葉の学習に効果的なイメージリーが失われるのではないかと心配を上で述べた。現行の英語教科書には確かに文学作品の利用は少ないが、原作に対してどのような改作がなされているか、イメージリーの扱いはどのようになっているかを見るために、1例ながら、検討することにする。

20世紀イギリスの作家でストーリーテリングの名手、モーム (William Somerset Maugham) の短編を取り上げる。*The Luncheon* (昼食会) という作品⁶⁾で、主人公の若い作家は、ファンの中年女性から手紙をもらい、高級レストランで食事をごちそうすることになる。もとより駆け出しの作家であり生活の余裕などなかったが、女性ファンの手前、いい格好をしようとしながら、彼女の注文にはらはらす様子が見事に描かれ、20年後の再会では面白い結末が待っている。

I was living in Paris. I had a tiny apartment in the Latin Quarter overlooking a cemetery → I was living in a tiny apartment in Paris (→ の前が原文、後ろが改作されたもの。以下同様に表記する。) 原作では、具体的にどのような街かがわかるし、共同墓地に面しているということからも多分小さな安アパートのイメージであるが、改作では、小さいというだけの簡単な記述となっている。

(Few men, I may add, learn this until they are too old to make it of any consequence to a woman what they say.) I had eighty francs (gold francs) to last me the rest of the month and a modest luncheon should not cost more than fifteen. If I cut out coffee for the next two weeks, I could manage well enough. → 省略

前半のウィットの効いた男性への皮肉と後半の突然の出費をどうやって切り抜けるかの主人公のやり繰り算段が面白いところであろう。金貨やコーヒーなどのイメージがわかりやすい。

— by correspondence — → 省略

ここでは、「返事をした」ということはどちらも同じであるが、改作では手紙を書くイメージが浮かびにくい。

She was in fact a woman of forty (a charming age, but not one that excites a sudden and devastating passion at first sight) , and she gave me the impression of having more teeth, white and large and even, than were necessary for any practical purpose. She was talkative, but since she seemed inclined to talk about me I was prepared to be an attentive listener. → 省略

この直前の部分に、初めて会った女性の説明はあるものの、原作は、更に詳しく皮肉も効いている。特に、歯の描写は、後に彼女が、一口しか食べないと言いつつ次々に御馳走を口に入れる展開への伏線ともなっている。イメージ豊かな部分であろう。

I don't believe in overloading my stomach. → 省略
懐具合が心配で、少ししか食べないで我慢している彼女に対して彼女の言った言葉。思わず両者の腹に目が行きそうではないか。

She gave me a bright and amicable flash of her white teeth. → and amicable 省略

改作では、彼女の第一印象の白い歯が、更に輝いて威力を増すイメージが、少し弱まっていないだろうか。

I mentioned casually. . . → casually 省略

原作では、casually の一言で、うそを悟られないようにさりげなく言った声の調子が伝わって来る。聴覚的イメージである。

his broad, priest-like face → priest-like 省略

原作は、主人公の必死の願いも届かず、得意げに、にこやかに応対するウェイトアの表情を言ったものだが、イメージするのは少し難しいかもしれない。

they had some so large, so splendid, so tender, that it was a marvel. → they had some.

驚くほど素晴らしいアスパラガスのイメージであるが、改作は、あるというだけでそっけない。

It would be mortifying to find myself ten francs short and be obliged to borrow from my guest. I could not bring myself to do that. I knew exactly how much I had and if the bill came to more I made up my mind that I would put my hand in my pocket and with a dramatic cry start up and say it had been picked. Of course it would be awkward if she had not money enough either to pay the

7. 考察

bill. Then the only thing would be to leave my watch and say I would come back and pay later.

→ 省略

作品の前半で、まだ女性に会う前の主人公のお金の算段の様子が、改作では省略されていたのだが、はるかに切羽詰まった状況の主人公の思惑をイメージ豊かに伝えてくれる叙述である。改作では、やはり作品の前半部と同じように省略され、その点で首尾一貫してはいるが、残念でもある。

The smell of the melted butter tickled my nostrils as the nostrils of Jehovah were tickled by the burned offerings of the virtuous Semites. → 省略

聖書への言及もあり、前の priest-like と同様に、文化的に難しいと判断されたのであろうか。しかし、バターで炒めたアスパラガスのたまらない位おいしそうなお匂いと味まで伝わって来るのではないか。この嗅覚的味覚的イメージの省略も惜しまれる。

I was past caring now, so I ordered coffee for myself and an ice cream and coffee for her. → 省略

やけ気味の主人公の様子。明確なコーヒーとアイスクリームのイメージ。

with an ingratiating smile on his false face → with a smile on his face

高価でおいしそうなお桃の入った籠を運んで来たウェイトアの表情について言ったものであるが、原作では、きげんを取るような笑顔、作ったような表情などが、主人公の気持ちの反映として生き生きと伝わって来るが、改作には無い。

They had the blush of an innocent girl; they had the rich tone of an Italian landscape. → 省略

素晴らしい桃の描写。主人公の、相手の女性に対する当てつけも感じられるところ。

I do not believe that I am a vindictive man, but when the immortal gods take a hand in the matter it is pardonable to observe the result with complacency. → 省略

恐らく長年の飽食のためであろう、でぶ女と化した女性を前にして、内心満足感に浸る主人公のイメージであろうか。改作では、女性の挿絵でうまく補っている。

イメージアリーに関わる変更箇所を、ほとんど取り上げた。視覚的なイメージが多いが、聴覚的、嗅覚的、味覚的なイメージも使われている。その中で省略された箇所はかなり多く12箇所、書き換えが5箇所となっている。省略箇所は、それぞれが分量も多い。変更されたその他の部分は、分量的にはかなり少ないが、短縮のための省略が5箇所、やさしい単語や表現への書き換えが、例えば、luncheon → lunch, chat → talk, anticipated → expected, bill of fare → menu, unwise → not wise, proceeded → went onなどで、同じ語句の書き換えを別にすれば、全部で20箇所程度である。1箇所だけ、I ordered half a bottle. → I ordered only half a bottle. のように、原文にない“only”が加えられていた。「シャンパンは高価なので、1本はよう注文しなかった。」ということをわかりやすくする配慮からであろう。

大きな変更や省略が、ほとんどイメージアリーに関わっていて、その多くが失われているのは、検討した通りである。折角イメージアリーの効果の期待される文学教材でありながら、予想以上に悪い結果であったと言わざるを得ない。

既に述べたが、決してこのような教材化が悪いと言っているのではない。文学作品の教材への改作は、それぞれの観点を踏まえて行えば、当然このような結果が予想される。小説のような文学教材の基本的な楽しみは、先ず、面白いストーリーにある。人物描写、心理描写、独特の文体、比喩表現、イメージアリーなどを楽しむのは、その後で、少しレベルが上がってからではないであろうか。そして、ここで、ストーリーもまた記憶に資するというのを忘れてはいけないだろう。記銘方略あるいは記憶術と言っても良いだろうが、その精緻化において記憶材料をストーリーに組み込むことは非常に有効な手段となっている。文学教材においても、積極的に利用すべきであろう。

今回検討した教材では、表現が喚起するイメージアリーの損失を挿絵で補う試みがされている。レストランのテーブルの様子、ウェイトアの表情、おいしそうなおアスパラガス、そして、既に言及したが、20年後に再会した時の彼女の容姿など、中々良い試みであろう。しかし、言葉の学習という点からすると、表現との密接度が低いこと、文学の良さの一つは読者が自分なりのイメージを描ける点にあり、そうして共感、体験へと進むこと、別の観点から言うとエピソード記憶に近づくとするならば、それは、やはり次善の策と考えられる。

8. おわりに

文学作品を鑑賞し楽しむのなら、イメージリーを含めて原作をそのまま読むべきであろう。しかし、言葉の学習という観点からすると、文学作品の改作による教材化は避けられない。その時、私たちは、作品から失われたイメージリーを嘆くだけで良いのだろうか。折角の学習の機会を逃して良いのだろうか。改作の面から考えると、簡単ではあるが、やはり可能な範囲でできるだけイメージリーに関わった部分は残すのが良い。そして学習のレベルが上がれば、残すのは徐々に多くすべきであろう。次善の策としては、挿絵などで補い同様の効果を目差すのも良い。学習の面から考えると、表現が喚起するイメージは、飾りと思わず、生き生きと、ありありと思い描きながら読むのが良い。表現を通して自分なりのイメージを思い浮かべて楽しみ、共感できればなお良いであろう。場合によっては、教材化で失われたものを、原作から再現することもできる。そうすることによって、言葉の学習において、文学教材ならではのイメージリーの効果や追体験による効果が期待できると考えられる。

【注】

- 1) Gillian Lazar, *Literature and Language Teaching*, Cambridge Univ. Press, 1993, pp.15-19. や Allan Duff & Alan Maley, *Literature*, Oxford Univ. Press, 1991, p.6.などを参照。
- 2) 川口喬一 岡本靖正(編)『最新文学批評用語辞典』研究者出版 1998 p.26
- 3) 福原麟太郎 吉田正俊(編)『文学用語辞典』研究者出版 1978 p.145
- 4) 塩路ウルズラ 「脳の神経回路システム知見に基づいた学習と教授法—一つの事例：語彙習得—」板山真由美 森田昌美(編)『学習者中心の外国語教育をめざして』三修社 2004 pp.42-43
- 5) *ibid.*
- 6) Somerset Maugham, *The Luncheon*, Macmillan Language House, 1990. で原作を参照。改作された教科書版は、W. Somerset Maugham, “The Lunch”, 斎藤武生他 *OAK ENGLISH II* 開拓社 1998 pp.140-150 を使用した。